

6月1日 主の昇天

使 1:1～11 エフェ 4:1～13 マコ 16:15～20

1. マコ

v.19-20 「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。一方、弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。主は彼らと共に働き……」

私たちの救い主である主イエスは、天に上げられ神の右におられるキリストであります。使徒たちの宣教の背後にいてこれを導かれた方は、神の右におられる天上のキリストでありました。現代の教会とその宣教もこの同じ天上のキリストによって支えられ導かれているのです。教会とその宣教の権威は、神の右におられるキリストの権威であって、決して人間の権威ではありません。ですから使徒たちに向かって語られた復活の主の言葉は、現代の教会においてもいささかもその真実性を失ってはいないのです。

v.16 「信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。」

2. 使

使徒たちを「わたしの証人」(v.8) としてお立てになった復活のキリストは、天に上げられましたが、正にその天から使徒たちと共に働いて教会を造り上げる御業を続けておられます。今日に至るまで教会が使徒たちの伝えた福音を聞くことによって歩み、使徒たちの宣教を土台として成り立っているのは、神の右におられる天上のキリストが今もこの教会の主であり支配者だからです。

私たちは今は天上のキリストをこの目で見る事が出来ないという意味で、「離れ去って行かれ」(v.10) しましたが、それは再臨の日が来るまでしばらくその御業を止めて休みに入っておられるということではありません。そうではなくて、むしろ歴史の中の教会を導き支え担う主となるためでありました。ですからすべて洗礼を受けてキリストの救いに与かった代々の時代の信者たちは、必ずその復活の日には再びキリストをこの目で見ることになるのです。

v.11 「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有り様で、またおいでになる。」

3. エフェ

この天に上げられた(昇った)キリストが、使徒たちとその協力者である数々の奉仕者を通して福音の宣教を導き、教会を成長させ造り上げて行かれました。ですから教会は一つ(体は一つ)であって、いくつもの主、いくつもの信仰、いくつもの洗礼というものは存在しません。

現実には世界中に多くの教派に分裂したキリスト教会があり、互いにその相違を強調して他を非難するという歴史が、すでに初期の頃から今日に至るまで続いて来ました。第二バチカン公会議はこの分裂の克

服を目指して、“エキュメニズムに関する教令”を布告しました。カトリック教会の信者が今朝の聖書の日課に促されて、今一度これを重く受け止めることは大切なことでもあります。

「……それにもかかわらず、信仰によって洗礼において義とされた者は、キリストに合体され、それゆえに正当にキリスト信者の名を受けているのであり、カトリック教会の子らから主における兄弟として当然認められるのである。」(上掲3)

4.

現代の教会にも使徒の後継者である司教たち、その協力者である司祭および各種の奉仕者がいます。そして教会は、父の右におられる天上のキリストがこれらの人々をお立てになり、今もその働きを導いておられると信じています。

しかし誤解を避けるために注意しなければならないことは、今も教会を導き支え担い続けておられる天上のキリストは、最初の使徒たちを選んでこれを世に遣わし、一・聖・公の教会をお立てになった方と同一のキリストであるということです。後の教会が使徒の後継者たちを選任することによって、最初の使徒たちが立てた教会と常に同一の教会であろうとして来たことは、正しいことでした。それで“一・聖・公”に加えて“使徒継承の教会”と告白されて来たのです。

現代の司教や司祭、現代の教師や預言者が立てられるのは、最初の使徒やその協力者、最初の教師や預言者が排除されたり否定されることによってではなく、同じ信仰、同じ洗礼、同じ教会が受け継がれて行くためであることを理解しましょう。時代は変わり、この世は移り行きますが、教会を導き支え担い続けておられる方は同じ昇天のキリストであり、この方はかつての使徒たちが「見たのと同じ有り様で、またおいでになる」(使 1:11) 終末の王なのですから。

アーメン、ハレルヤ。

6月8日 聖霊降臨の主日

使 2:1~11 ガラ 5:16~25 ヨハ 15:26-27, 16:12-15

1. 使

使徒言行録は教会の誕生を、五旬祭の日の聖霊降臨と使徒たちによる福音宣教を起点として物語っています。この記述には単なる出来事の順序以上の、もっと神学的な内容があって、現在のカトリック教会の典礼暦はその適切な解釈に基づいて聖霊降臨の主日を復活節の最後を締めくくる祭日と定めています。

私たちの主イエス・キリストは十字架に掛けられて死んだ後、復活して弟子たちに神の国の福音を語り聞かせ、天に上げられて神の右の座に着かれました。五旬祭の日に使徒たちに降った聖霊は、この天上のイエスが父のもとから送られたものでありました。ですから使徒たちとその後の教会に注がれた聖霊は、神の右に上げられた復活のキリストと深く結びついています。

この日使徒たち一同に聖霊が降ると、多くの国の人々はそれぞれ自分たちの国の言葉で使徒たちから福音を聞くことが出来ました。聖霊が使徒たちの宣教を人々に聞かせ、かつ理解させたのでした。

私たちはこの使徒言行録の記述を、教会の誕生の起点のみならず、歴史の教会の存続の根拠を指し示すものとして、理解しなければなりません。カトリック教会の典礼暦は、今日の主日をそのように位置づけているのです。

2. ヨハ

vv.26-27 「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。」

現代の教会において、信者たちが「福音とは何ですか」と問われたら、恐らく非常に曖昧な返答しか返って来ないのが普通であろうと思われれます。はっきりと「これが福音だ」と説明出来る人はおらず、抽象的でぼんやりとしたイメージや、単に枝葉にしか過ぎないような意見が、それも自信なさそうに語られるだけなのです。たまたま勇ましく見解を主張する人がいる場合の多くは、たいていは異端的なものであったり、あるいは伝統的キリスト教とは異質な新しい意見(もう一つ別の福音)に過ぎません。

21世紀の私たちの教会は、第二バチカン公会議の公文書である「神の啓示に関する教義憲章」の助けによって、聖伝と聖書に立ち帰ることによる福音の再発見を、司教や司祭から一般の信徒に至るまですべての人々に行き渡らせることを、緊急な課題として考えなければなりません。

v.26は、キリストの福音を証しするものは先ず第一に聖霊であると述べています。しかしそれに直ちに続いて v.27は「あなたがたも」と、使徒たちの証言をこれに並置しています。教会が聖伝と聖書を通して使徒たちの証言に耳を傾けるとき、聖霊はその証言と共に働いて福音を人々に教えるのです。この最も基本的な手順が無視されて、人間の文化や思想や主義主張が聖伝と聖書を押しのけて発言力を獲得して来

た数世紀が、現代の教会の背景をなしています。しかし21世紀の教会は、再び使徒たちの証言に立ち帰らなければなりません。使徒たちの証言を通して、使徒たちが理解したのと同じように福音を理解するために、聖霊は現代の教会を訪れようとしておられることを信じましょう。

3. ガラ

「肉の欲望」「肉の望むところ」という表現から、単に道徳的な次元の事柄だけしか理解しないなら、私たちはこの使徒パウロの手紙の本来の意図を見失うこととなります。この手紙は正しい「キリストの福音」に対する誤った「ほかの福音」「もう一つ別の福音」の攻撃に激しく応戦するために書かれました(1:6-7)。使徒パウロは、「キリストの福音」は霊の導きに従って歩むところに存在し、「ほかの福音」「もう一つ別の福音」は肉の望むところに誕生することを語ったのです。

使徒たちの証言を軽んじたり無視して、人間が各自自ら福音の解釈者になれるかのように思い上がることは、間違っています。21世紀の教会が再び使徒たちの証言を通して正しい「キリストの福音」を聞くことが出来、キリストの体として造り上げられて行くことを私たちは願ひましょう。この正しい「キリストの福音」の継承を支え導いてくださるのは、父のもとから教会に聖霊を注がれる天上のキリスト御自身なのですから。 アーメン、ハレルヤ。

6月15日 三位一体の主日

申 4:32～40 □マ 8:14～17 マタ 28:16～20

1. マタ

vv.19-20 「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

使徒たちは復活のキリストによって派遣された人々でありました。その使命は人々にキリストの福音を伝えてこれに洗礼を授けること、そして洗礼を受けた人々による教会を訓練し育てることでありました。代々の教会はこの使徒の使命を受け継ぐことによって、神の国の相続人としての教会であり続けて来ました。そしてこの教会と共に、復活のキリストは今日に至るまで働き続けておられます。世の終わりまで……。

「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け……」という表現そのものは、実はマタイ福音書に初めからあったのではなくて、恐らく2世紀半ば頃に書き加えられたものであろうと考えられています。新約聖書の他の箇所では「イエス・キリストの名によって洗礼を」(使 2:38, 8:16)と書かれているからです。三位一体形式そのものは150年頃になって信仰宣言の形として現れて来ます。しかしそれは初代キリスト教の信仰をいささかでも変質させたのではなくて、むしろより総合的にまた正確に述べるための神学的所産であったということ、強調せねばなりません。私たちに伝えられて来ているマタイ福音書は、この加筆修正によって、今もそして世の終わりまでも教会と共に働き続けておられる主キリストへの信仰を、私たちに呼び覚まします。

2. 申

私たちの神は、歴史の中で働き続けておられる方であり、しかも終末の到来と神の国の実現という目標に向かって救済史を進めて行かれます。旧約聖書の中には、この救済史を導かれる神への強烈な信仰を実感させる言葉として、「主は生きておられる」(王上 17:1) というのがあります。

キリスト教会は旧約聖書に語られているイスラエルへの神の約束を、洗礼の恵みを通して受け継ぎました。

vv.39-40 「あなたは、今日、上の天においても下の地においても主こそ神であり、ほかに神のいないことをわきまえ、心に留め、今日、わたしが命じる主の掟と戒めを守りなさい。」

新しいイスラエルであり神の国の相続人である教会にとっては、神は唯一であり(1テモ 2:5)、ほかに神はいないのです。実に教会は、神が御子の血によって(使 20:28)「他の国民の中から選び出し、御自身のものとされた」(v.34) ものなのです。そして聖霊は、聖伝と聖書を通して“古い昔の言葉”ではなく“現在の神のことば”を教会に語るのです。

3. ロマ

初代教会以来今日に至るまで洗礼式は、受洗者と教会が信仰宣言を用いて共に信仰を告白する場であり、人は洗礼によって「神の霊に導かれる者」(v.14) たちの共同体に迎え入れられます。ですから当初から、聖霊は洗礼を有効にし、受洗者を神の国の相続人とするものと理解されていました。イエス・キリストの名による洗礼は父なる神の愛から発した秘跡であり(v.15)、聖霊の導きによって歩み始めることであるとの力強いメッセージを、私たちはこのテキストから聞かされています。

形式としての三位一体という表現は、聖書の時代よりも後になって出現したのですが、それはキリストの福音を総合的にまた正確に述べ、そのことによって今日に至るまでの福音の伝承の不変性を守ることとなった、古代教会の重要な神学的所産でありました。

4.

私たちのミサの開祭は入祭の歌で始まり、それに続いて司祭と会衆があいさつを交わします。

「父と子と聖霊のみ名によって。」 「アーメン。」

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに。」 「また司祭とともに。」

主日の朝に神によって呼び集められた会衆は、三位一体の神との交わりの中で一つになり、共にミサをささげる民としてのあいさつを交わすのです。(土屋吉正著「ミサがわかる」p.31 参照)

洗礼の秘跡がそうであるように、教会のその他のすべての働きも父と子と聖霊の名によって行われることによって、キリストの体は造り上げられて行きます。実に私たちにとって今も「主は生きておられる」のです。 アーメン、ハレルヤ。

6月22日 キリストの聖体

出 24:3~8 ヘブ 9:11~15 マコ 14:12-16,22-26

1. マコ

主イエスはその地上の生涯における弟子たちとの最後の食事の席で、パンを御自分の体に、ぶどう酒を御自分の血に結びつけて、教会のために感謝のいけにえを制定されました。それはそのあと直ぐに続く十字架の死によって立てられる新しい契約を、主の再臨の日に至るまで教会が記念することが出来るようにするためでした。

ミサは神の国の饗宴の先取りであり(典礼憲章 8)、共にこれをささげている歴史の教会は、キリストの血による新しい契約によって一つに結ばれています。ミサは後のキリスト教会が創作した祭儀ではなくて、受肉された神の子イエスに起源する典礼であり、従って教会の誕生のときから、洗礼を受けて救われることとミサをささげる共同体に迎え入れられることとは一つに結びついていました。

2. 出

モーセはシナイ山で、十戒とそれに付随する契約の書の律法を民に読み聞かせると、いけにえの動物の血を民に振りかけて言いました。

v.8 「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」

神とその民との間の最初の契約は、このようないけにえの血によって成立したのでした。ですから新約(新しい契約)の民である私たちキリスト者は、キリストの福音と私たちに与えられている救いが、新しい契約の血であるイエス・キリストのいけにえに依存しているものであることを十分に理解しなければなりません。

3. ヘブ

主イエス・キリストの死と復活は、歴史の中での他のすべての出来事と一つの点で根本的に異なっていました。それは他の出来事が地上の歴史の中の出来事に留まるのに対して、これは地上の出来事でありつつ同時に天上の出来事であったということです。

w.11-12 「けれども、キリストは、すでに実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な(天の)幕屋を通り、雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。」

使徒たちが宣教した福音には、この天上の事柄、人々が信仰によってだけ受け入れることの出来る永遠の贖いの実現が、その基本構造の一部としてしっかりと組み込まれていました。キリストが新しい契約の仲介者である(v.15)のは、この天上の出来事であるキリストのいけにえによって、贖われた民である私たち会

衆が将来の神の国を受け継ぐからであって、決してこれは他のすべての出来事と同じ単なる地上の事柄ではないのです。

典礼憲章は主の死と復活の記念である私たちのミサについて、次のように明確に述べています。

「地上の典礼において、われわれは天上の典礼を前もって味わい、これに参加している。この天上の典礼は、旅人であるわれわれが目指す聖なる都、(天の)エルサレムにおいて行われており、そこにはキリストが、至聖所と真の幕屋の奉仕者として、神の右に座っている。われわれは、天上のすべての軍勢とともに、主に栄光の賛歌を歌い、諸聖人の記念を尊敬して、彼らの交わりに参加することを望み、われわれの生命である主が現れ、われわれも主とともに栄光のうちに現れる(神の国実現の)時まで、救い主、われわれの主イエズス・キリスト(の再臨)を待ち望むのである。」(8)

今朝のミサのための公式祈願(集会祈願、奉納祈願、拝領祈願)も、約束された神の国を将来受け継ぐであらうすべての信者のための祈りであることを覚えて、私たちは喜びのうちにアーメンと唱和しましょう。

アーメン、ハレルヤ。

6月29日 聖ペトロ聖パウロ使徒

使 12:1～11 IIテモ 4:6-8,17-18 マタ 16:13～19

1. 使／マタ

使徒ペトロはユダヤ人キリスト教団の、そしてエルサレム教団にとっての初期の指導者でありました。使徒言行録はこの12章をもってペトロの活動に関する報告を終えてしまっているため、私たちはそれ以上を知る確かな文献史料を持っていません。カトリック教会には使徒ペトロについてのいろいろな伝承がありますが、それらは教理的史料ではあっても歴史的史料とはなり得ないものです。

私たちが聖書から知ることが出来るのは、使徒ペトロの生涯と特にその殉教に至る記録ではなくて、復活のキリストが彼を使徒たちの頭とし、彼を土台として教会をお建てになったという、実に教理的信仰的な事柄です。

「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」(マタ 19:19)

使徒ペトロは個人としてではなく、使徒団の頭として他の使徒たちと共に、復活のキリストによって実際に教団の土台の岩とされました。

2. IIテモ

使徒パウロがローマで軟禁状態にされている数年の間に書いた手紙の一つが、この“テモテへの手紙2”です。すでに彼がローマ訪問前に懸念していた(ロマ 15章)通り、使徒パウロはそこでユダヤ人キリスト教団の中にあるかなり深刻な対立と彼自身への反抗の渦に巻き込まれたように想像されます。少なくとも新約聖書から私たちが知る限りでは、彼はその活動の成功よりもむしろ自らの殉教こそが近づいていることを、明確に感じていました。

そのような中でなお、彼は福音の宣教者でありました。彼が近づく殉教の日を前にして書き残した弟子テモテへの手紙が、現代のキリスト者である私たちをも慰めるのは、復活のキリストが彼を異邦人に対する使徒(ガラ 2:8)として用い続けておられるからです。

3.

聖ペトロと聖パウロが、いつどこで殉教したのかという確かな史料は存在していません。この二人がネロ帝の迫害によって別々にローマで殉教したという伝承は、かなり本当らしいとは言えても、純粋に歴史学的に立証し得る事柄ではないのです。

教会憲章はローマ教皇の首位権の根拠を、それがペトロの後継者であることに置いており(18)、聖ペトロがローマ教会の初代の司教となったからというような説明を用いてはいません。それは歴史学的には立証

出来ない(4世紀に初めて主張された)話だからです。

ラッツィンガー枢機卿が今から2年ほど前の彼の論文「地方教会と普遍教会」で述べたことは、今日の祭日を私たちが理解する上で大いに役立つと思われるので、ここにその一部を紹介します。

彼は「ローマ教会は、普遍的責任を有する特別な教会ではあるが、(それでもなお)一つの地方教会であり、普遍教会(そのもの)ではない」と述べて、私たち会衆一人一人が確かにキリスト者であることの根拠を次のように説明しています。「何よりも先ず、洗礼がある。それは三位一体論的な、それゆえ徹底的に神学的な出来事であり、地方教会の一員となるということをはるかに越えた意味を持つ。……洗礼は個々の共同体から起こるわけではない。むしろ洗礼において、一なる教会への扉が私たちに開かれる。……このことに基づき、教理省の書簡は、教会によそ者はいないと言うことができる。教会にいるすべての者は、どこにいてもそこが我が家である。ベルリンの教会で洗礼を受けた者は、ローマ、ニューヨーク、キンシャサ、バンガロールその他どこに行こうとも、常にその教会が、自分が受洗した教会と同じく我が家なのである。住所変更届を書く必要はない。そこが、同じ一なる教会だからである。洗礼は一なる教会から生じて、一なる教会のうちへと私たちに生を授けるのである。」(神学ダイジェスト No.93)

聖ペトロも聖パウロも、このような「一なる教会」がその上に建てられている岩を構成する使徒たちであり、殉教者であるということです。そして今もこの使徒たちを通して現代の教会に、キリストの福音は語られ続けているのです。 アーメン、ハレルヤ。